

# 無念の魂魄たましいに伝える

あいざわみつや  
相沢光哉 ● 本会理事  
宮城県議会議員



相沢光哉理事

仙台七夕を間近にした八月一日、日本李登輝友の会の国内十三番目の支部となる宮城県支部の設立総会が、約七十名の参加をえて仙台市内で開催された。来賓としてお迎えした田久保忠衛氏の「わが国の安全保障と台湾」と題する記念講演もあり、大変有意義で、盛り上がった一夜となった。

設立準備にいささか関わった一人として、日台共栄の一つの芽が宮城県に根付いたことを、率直に喜び感謝したい。

支部長には、みちのくYOSAKOIまつり実行委員長で、仙台市民手づくりのイベントを数多く手がけてきた嶋津紀夫氏に就任していた。現在、支部会員総数は五十三名だが、地元経済界有力者や宮城県日華親善協会、宮城

県台湾同郷会のメンバーも多く参加しており、これからも会員増強に努力していきたいと考えている。

さて、これまでに台湾には教えきれないほど訪れているが、最も忘れられないのが平成元年（一九八九年）三月の訪台であった。

当時、私は仙台市議会議員だったが、親友の桜井謙二県議会議員を団長とする七名のミッシヨンで、台北・仙台間の航空直行便開設の働きかけに訪れていた。二日目の夜、亜東関係協会の詹秘書長の招待晩餐会が和やかに開かれ、ホテルに戻った直後、思ってもみないことが起こった。桜井県議が心臓発作で急逝してしまったのである。四十歳の若さであった。

ここに、私が「桜井謙二君に捧げる」痛哭の

詞」としてのこした小文がある。自ら紹介するのは大変気が引けるが、あえてご一読をお願いしたい。(冒頭省略)

一九八九年三月二十二日。

君は異国で、帰らぬ人となった。

いや、日台関係の友好に精一杯尽くしていた君にとつて、

その地は異国ではなく、

宿命さだめの国であったのかもしれない。

有り余る情熱と明るさ、

限らない未来を手にしていた君には、

時間だけが足りな過ぎた。

時の舞台がふいに暗転し、

僕たちはむなしさと悲しみの

闇に遺された。

未完成のままの

君の夢と望みと理想を想うと

き、

慟哭の淵に一筋の光をあてる

のは

百代の過客だろうか

それとも

無念の魂魄たましいに應えるささやかな意志こころだろうか。

彼の突然の死は、私の政治家としての人生にも影響を与え、亡き親友の後継者として仙台市議から県議に転出し、今日に至っている。

そして、台湾との関係に見る私自身の言動にも、目に見えぬ彼の遺志が働いているように思えるし、また、それでよいと自覚している。

私たちの悲願だった台北・仙台間の定期便が、平成十六年、エヴァ航空によって実現したとき、仙台空港発の初便で「第二回謙ちゃんの翼」の参加者を募ったのも、ちよつと格好よく言えば「無念の魂魄に應えるささやかな意志」の表現でもあった。

この秋、敬愛する李登輝先生が再来日され、奥の細道探訪にみちのく仙台や松島を訪れていただけるとすれば、李先生と松尾芭蕉との、時空を超えた心の交流が醸し出されるような雰囲気づくりに、誠心誠意勉めていきたい。



支部設立総会で経過報告する相沢理事（8月1日）